

平成22年 5月15日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520123

研究課題名(和文) 国宝「初音の調度」の総合的研究—技法・意匠を中心に—

研究課題名(英文) Study on National treasure HATSUNE Maki-e lacquer Furnishings:
focused on technique and design.

研究代表者

小池 富雄

財団法人 徳川黎明会 徳川美術館 学芸員

研究者番号：40195631

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：美術史

1. 研究計画の概要

国宝初音の調度を4年間にわたり研究者、技術者らにより熟覧・調査して、近世大名蒔絵の最高峰とされる技法・意匠の特質を解明する。

2. 研究の進捗状況

過去3年間で毎年2回、合計6回、のべ12日間の熟覧調査を徳川美術館でおこない、あわせて研究発表をおこなった。年度ごとに、成果は撮影画像、発表レジュメなどをDVDにまとめて、参加者に配布した。部分的な復元模造を製作するために、梨子地粉、蒔絵分の製作発注をこれまでにした。最終年度の本年度に、これまでの所見にもとづいて製作材料、製作行程により初音蒔絵硯箱の一部分を再現する予定である。製作記録、調査記録なども、これまでの記録をさらに今年度で整理しまとめる。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

その理由としては、初音の調度は75件が、国宝指定されており、このうち蒔絵は源氏物語初音意匠45件、胡蝶意匠が10件、そのほかの多用な材質を含む意匠が20件である。このうち中核となる初音意匠作品の調査がほぼ完了し、ほかの意匠の蒔絵も半分程度が終了し、当初の計画した主要作品の熟覧調査をほぼ終えた。

染織、金工などの他の材質技法領域での研究は、ほとんど着手できていない。国宝・初音の調度は、製作年や由緒が明確な最上級の出来映の作例であり、漆工、金工、染織などいずれの領域から見るとすれば、最高の基準

作例となるが、まずは本研究が漆工史的な見地からの技法・意匠の分析として限定すれば、おおむね順調に研究ができた。さらに広い見地から見れば、広汎な研究材料としての素材を提供しうるのが予見できる位置にたどり着いた。たとえば、一例としてあげれば、自然科学的な材料としての宝石サンゴの分析や、金銀の加工技術などである。

4. 今後の研究の推進方策

過去3年間の研究で、解明・知り得た知見は膨大である。寸法計測、材質や構造の木組みなどの基礎的な観察を初めとして、どのような意匠が、複雑な調度の表面に描かれているのか、意匠配置されているか、などの写真データやノートを作成できた。

蒔絵としては、複雑な製作工程を、どの順番で仕上げていくのかも、重要な解明ポイントである。観察結果から導かれた製作行程の試論を、蒔絵技術者により部分的な復元模造を製作して検証する、作業も製作中である。このために重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝の漆工家、室瀬和美・北村昭斎の2人と工房スタッフらの参加を得ている。最終年の本年は、模造製作も、完成し製作工程の試論も確認できる。

本年度は研究成果のまとめ、発表と活用にも力を注ぎたい。11月13日から開催される「初音の調度展」(徳川美術館)において展示、講座、シンポジウム等の機会を積極的に利用して、発表していきたい。昨年度第26回日本文化財科学会にて九州国立博物館の協力を得て、同館の科学的分析機器を使用して初音調度のCT、レントゲン、高精細画像

分析の成果発表をした。また高知大学海洋生物学センター岩崎望准教授らの研究によると、海洋生物としての宝石サンゴが初音の調度には、使用されているのが明らかになった。従来の漆工史、蒔絵研究からの枠組みからは大きく広がった。発表することにより、当初予想もしない領域からのアプローチが生まれ、さらに新たな研究視点が発見されることが実感できた。今年度は、文化財保存学会（6月岐阜大学）での発表を予定している。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 1 件）

鳥越俊行（代表者）、川畑憲子、小池富雄、今津節夫、「国宝初音調度の科学的調査」、日本文化財科学会 第26回大会、2009.7.11、名古屋大学

〔図書〕（計 1 件）

竹内誠、小池富雄、「絵画と工芸」、角川書店、『江戸文化の見方』、2010 p243-280